

資 料

マックス・ウエーバー

『東エルベ農業労働者の状態における発展諸傾向』(二)

大 藪 輝 雄
吉 矢 友 彦 (共訳)

国際的競争状態の諸要求に即応した経営様式の改革の結果、農業労働者階級の總体的状態に生じた影響を明らかにしようとするれば、われわれは、今日ではもちろんもはやそうではないが、四・五十年前には東部における中位の砂質土で五百ヘクタールをいくらか上回る地主農場のほあいになお原則としてあてはまった、つぎのような農業経営の平均的状态から出発しなければならぬ。すなわちそれは、一方では機械経営

・集約的畜産ならびに強度の厩肥作物栽培が欠けており、他方では三圃式経営と粗放な穀草式経営からは脱け出している状態、つまり適度の家畜飼養をともなう非集約的穀物栽培が

支配する農場経営である。さてわれわれは、營業的見地の下の経営の改革がわれわれに関心のある諸点にいかなる影響を及ぼさざるをえなかったかを調べてみよう。

純粹の・またはほぼ純粹の畜産への移行に關してならば、この問題は簡單である。ここでは労働力のはげしい減少がその帰結である。このことは、わが国では一般にイギリス式の集約的放牧経営ではなくて、最少限の労働力しか必要としないところの、かなり粗放な放牧経営が問題になるであろうだけに、ますますそうである。穀物栽培が夏期と収穫期に必要なとする臨時雇労働力は、とくにつよくそれと関連している。

これに反して、伝統的経営様式と比較してこの点でもっと興味のある集約的農業（穀物の条播と耨耕・強度の人工施肥・打穀機械・機械経営一般・集約的耨耕作物栽培など）の作用はそれほど簡単ではない。まずはじめに集約的農耕への移行がおこなわれる個別的形態は、もちろんたがいに同じ作用をもっているわけではない。しかしそれにもかかわらず、それらすべてはつぎの一点で結果的には一致する。すなわち、全体として労働需要が絶対的に増加するばあい、冬期労働力にくらべた夏期労働力の需要が相対的に著しく増加することにおいて、ふつうまずはじめに絶対的増加の要因が作用し、発展のそれ以上の経過で相対的増加の要因が作用するようになる。したがって集約度がすこしずつ増大するにつれて、またその移行の初期の段階では、土地面積にくらべた常雇労働力の数はゆっくりと、常雇でない労働力の数はよりすみやかに増加する。それ以上の経過において、集約化へとより急速に移行するばあいにはほとんどもっぱら常雇でない労働力が増加し、高度の集約段階では常雇労働力の相対的減少だけでなく、ついには絶対的減少が生ずる。この最後の点、すなわち——普遍的ではないが、見たところ有力であり、出稼ぎ労働

者が著しく流入する諸地方ではほとんどまったたくふつうであるところの——常雇労働者の絶対的減少の発生は一驚に値いするであろう。この現象の原因はまた——後にくわしく述べると、——経営組織の種類だけにあるのではないにしても、しかしとにかくその中にもある。すなわち四季にわたって労働を配分するばあいの伝統的経営様式の技術は、その季節差をできるだけ縮めて、手持ちの労働力がいつでも使用されているように配慮することに、それゆえ一つの季節的経営としての農業の性格をできるだけ弱めることにあった。いいかえれば、人々は必要な労働をできるだけ一年間に配分した。しかし逆の意味でのその配置替えも同じく比較的容易に行なわれうるのであって、それゆえに、ふつう冬期に行なわれる労働の一部が、夏期と秋期の季節労働者に移され、それによって季節経営としての性格が強められ、年季労働者にたいする需要が絶対的にもすくなくならず縮小される。それが可能かつ合目的であるかどうかという先決問題は、ほかならぬ季節労働者がとくに容易に入手されるか否かにかかっている。このことは旧来の安定した諸関係の下で、伝統的経営様式がとられている場合にはそうではなかった。集約的耕作が普及

するにつれて事情はちがってくる。それは季節労働の増強を必要とし、その季節労働は季節賃金≠貨幣賃金の増大によって調達される。それによって、総じて農業での季節労働者であるにすぎない労働者の一階級、すなわち出稼ぎ労働者たちが、近代的交通機関とともに発生し、増大する。まずはじめに人口が多過ぎるかまたは粗放に経営された諸地方の過剰人口が移動する。しかしついにはその出稼ぎ運動は農業労働者階級一般のたえず大きくなってゆく部分をとらえる。こうして生み出された季節労働者という材料をいまや集約的経営がぎりぎりまで利用しつくす。出来高賃金はその作業成績を高める。しかし出稼ぎ労働者はそれ自身より仕事熱心でもある。故郷ではまだこのように高い賃金が精力的な労働へと駆り立てることのないポーランド娘たちは、外国では並はずれた仕事をやりとげる。出稼ぎ労働者はまさしくその家族や住みなれた環境の総体から引き離されており、グーツヘル自身の目から見れば、それはかれのための単なる労働力ではない。出稼ぎ労働者長屋はその機能上古代の奴隷長屋の貨幣経済的な類似物である。地主農場所有者は労働者住宅を節約する、なぜなら出稼ぎ労働者を泊めるにはほとんど費用がかからな

いかまたはまったく費用がかからないからである。さらにこれは土地割り当てをしないですむが、しまいにはなかんずくいっさいの行政法上および貧民救済法上の責任を免かれている。他方ではかれはより高い季節賃金の形態で、全体としては、かれがその伝統的報酬を一年をつうじて定住労働者に支払うであろうよりもふつう多くはなく、しばしばよりすくなくしか支払わない。経済性の見地の下での貨幣賃金の不利益は、かれにはこの形で相殺されて余りがある。シュレージェンの個々の部分では出稼ぎ労働者はすでに労働者階級の「根幹」とみなされている。——しかし、労働者の利益の見地からいって、いかなる理由が出稼ぎ運動をひきおこすのであるか。賃金水準の相違がいちばん近いものに思えるし、またそれはひとつのかなり協力的に作用する要素をなしている。しかし社会政策学会の調査も福音社会公議の調査も、こうした相違がまったくありもしなければ、人口状態にたぶん存在するであろうすべての事情も欠けているところをさえ、出稼ぎがおこなわれるということを、それどころか隣接する諸地域がまさしくその労働力を直接にかまたは迂回して交換していることを確認している。その理由は経済的要因と心理的要

因の結合したものである。出稼ぎ労働者は一般的生活基準——食糧だけが問題なのでもなく、それがとくに大事な問題でさえもない——や、よその働き場所においてかれを取りまいていような全体を故郷ではあたえられはしないであろう。

(1) このばあいにも、なかば未開の諸地方(たとえば上シュレージエン)から最高度の文化をもつ諸地方(たとえばザクセン)へと流入するようならばあいを考えてはならない。東部の内部での出稼ぎのばあいには、報告書の証明するところによれば、出稼ぎ労働者の食糧はまったく圧倒的に——例外はあるが——すべての中でもっとも悪いものである。

しかしまさにこの引き下げられた生活基準と、慣れた故郷の環境を捨てることによつて増大した労働エネルギーにもとづいて、かれはよそでの賃率が故郷におけるよりも高くないばあいでさえ、故郷の労働関係の下では貯えることができないうであろうよな比較的大きな金額を儉約して残す、そして——当然の要求だが——どのみち仕事のない冬季には「休暇」をとることができる。しかしさらにまたとくに、流出は故郷の近隣のグーツヘルの下で仕事をもとめる宿命からかれを解

き放す。しかしまさしく故郷での労働こそは歴史的にも觀念

的にも伝統的支配関係を結びついており、労働者をよそでの労働に駆り立てるのは、人格的自由への無意識の衝動なのである。かれらはその慣れた生活諸関係を隷属からの解放へとむかう努力のために犠牲にする。つまりかれらの愚かしい

忍従はうち破られる。しばしば苦情のである農業労働者の「流動化」は、同時に階級闘争への動員の第一歩である。

われわれが見るのは、つぎのことである。すなわち計画的な「世界経済への編入」の帰結は、集約的畜産へと移行できないところのその地積——うたがいても最大のものだが——での東部の農業諸経営にとつては、もしそれらのものが大経営のままдейようとするれば、すでに人口層形成の見地の下において、重大なものである、ということである。もしそれが国際的な生産分業の要請に服して粗放な放牧経営へと移行するばあいには、土地生産物の栄養価と人口数は減少する。

それが土地耕作の増大の下で集約的農業へと移行するばあいには、それは常雇労働者の相対的意義を、部分的にはその絶対数をも縮小するが、他方では労働者階級の動揺をうながし、それによつて一個の近代的流浪者層の形成をつうじて人口編

成の安定性を危うくする。それはただつぎのこと、すなわちまさしくより、低い文化水準にある外国の生産者の競争能力は、弱められていない土地の自然力と、古い文化をもった一住民の人口密度と生活諸要求がつくり出す社会的総体による間接的負担の欠除にもとづいているということに、あまりにも明瞭にあらわれている。東部のとくにめぐまれてはいない土壌における農業大経営は、大経営として競争に耐えつづけるためには、その土地耕作と労働者および企業家の社会的水準において文化段階を一段階降り、ことができればならなかつたであらう。

この宿命的な事情は、農業労働者階級の純粹に物質的な状態——つまりかれらの食糧状態——にたいしても、労働市場での自由競争が組織的な原理としてはじめて農村にもあらわれる時機には決定的な意義をもっている。農村地方に特有の伝統に束縛された賃金計算法は、その結果として労働者の所得状態や栄養状態が純経済的要因によっては部分的・間接的にしか規定されず、他方直接的には確固たる典型的労働制度の伝統があたえたあの堅い足場をゆるがすような事情によつて規定されるということも、ともなっていた。しかしそれは、

近代的経営制度がひきおこすところの、そうした変化のもとでこそあてはまるのである。

労働者の状態にある影響を及ぼしうるであろうところの、そうした諸要素のうちもつとも重要なものを観察しよう。それはつぎのものである。I 個別経営の規模の相異。II 土地の優劣。III 土地経営の集約度の相異。IV 土地所有の分配。まずはじめに、労働者の状態に及ぼす経営規模の影響に関しては、経営が大きければ大きいほど、それは耕作面積にくらべてますます僅かの常雇労働力しか必要としないという命題が、かなり一般的に立てられてよいように思われる。地味と集約度がたがいに相等的な状態のばあい、耕作面積にくらべて常雇労働力が減少することは、いまやいっそう規則正しくかれらの状態の向上と結びつけられるように思われる。⁽¹⁾

(1) ケーニヒスベルク郡（農村部）からの福音社会会議のアンケートにもとづく労働者の申告と地主農場の経営簿から集められた、非常に綿密な報告によれば、土壌の状態がほとんど影響しないほど局限された一区域内で、またところはほぼ同じ耕作集約度でもあり、しかも一様に同じ貨幣換算率が適用されるばあいに、手伝夫役（ハンデルスベルク）の費用

を差し引いたインスタ家族の純収入は、いくつかの隣接する地主農場ではつぎのようである。

① 面積三五ヘクタール毎にインスタマン一人のばあいには、五二・五・三五マルクになる。

② 面積四〇ヘクタール毎にインスタマン一人のばあいには、七四二・五〇マルクになる。

③ 面積四三ヘクタール毎にインスタマン一人のばあいには、七五二・五〇マルクになる。

④ 面積五三ヘクタール毎にインスタマン一人のばあいには、八〇三・六三マルクになる。

それゆえに完全な対応がある。第五例ではその収入はつぎのようである。

⑤ 面積五七ヘクタール毎にインスタマン一人のばあいには、六四五マルクになる。

ここでは一部分打穀機械経営が報告されている。第一例と第二例との差はめだつて大きい。ここでも第一例については一部分打穀機械経営が報告されている。第一例と第五例では相互のあいだでふたたび規則正しい。たがいはほぼ同じ経営形態だけが比較可能な資料になること

がわかる。(ちなみにこの例では労働集約度の相違は経営規模とは関係がない。)

これは工業における周知の類例に一致する、そしてこの例では役にたたない被扶養者を除いた手持ち労働力のより合理的な配置だけが問題なのであるから当然のことである。そのことからの帰結は——そしてそれは経験に一致しているが——他の事情がひとしければ、つまり地味と経営集約度がひとしはいばあいには、より規模の大きい大経営の労働者はより規模の小さい大経営の労働者よりも好遇されているだろう、ということである。しかしこの命題は、集約度の異なる経営諸形態がたがいに比較されようとするやいなや、またとくに、たとえば上シュレージエンと東フレイセンのように異なる労働制度と労働者の文化段階とをもつた直接に隣接していない相異なる諸地方の地主農場が比較されようとするばあいには、ただちに正当でなくなる。比較できるのは、伝統的に同じような状態にある局地的区域についてだけである。同様に、農民的諸経営の労働者の状態が大経営のそれと比較していかなる事情にあるかは、まったく別個の問題である。社会的性格全体がひとしい経営だけが、たがいに比較できるのである。

げた第三の要因、つまり経営集約度の増減に帰せられるかに注目しよう。経営集約度の低下は——それが労働集約度であろうと資本集約度であろうと——東部に存続している大経営のばあいには、ふつう粗放的畜産による耕圃労働の駆逐と同じ意味をもつであろうし、また伝統的経営様式にたいして集約度の増大は、より集約的な畜産の形態においてか——そのばあいにはその経営の「資本集約度」の増大が問題である——、またはより集約的な農耕の形態においてか——そのばあいにはその経営は資本ならびに労働投下の集約度が増大する——、そのいずれかで起りうる。

大経営における純粹の・またはほぼ純粹の畜産経営への移行は、労働者数が著しく減退するばあいには、気候の状態がこの移行の決定的な誘因となるところで、だがまたそこでのみ、労働者の状態に有利な影響を及ぼすように思われる。¹⁾

(1) その気候が集約的畜産に決定的に有利なフィッシュェハウゼン郡の比較的集約的な放牧経営では、報告によればその労働者は殺作をいとむ経営におけるよりもずっと好遇されている。フィレーネ郡からの報告によれば、気候的長所がないところでは、事態はその逆である。

ここでは資料が非常に不足しているが、その問題はわれわれにとつてとりわけ重要なことでもない。耕圃耕作を犠牲にして増加する畜産が労働力の数を減少させ、こうして農村地方の人口一般を著しく減少させる、ということだけが、認識可能な、またわれわれに興味のある作用としてわれわれには残っているのである。

さて、われわれにここでとくに興味のある集約的耕作は、農業では機械労働力による人間労働力の置き換えが工業にくらべるとはるかに副次的な役割しか演じないので、必要とされる労働力のこうした減少へはみちびかない。むしろそれはさしあたり——すでに上でたしかめたように——ただ労働者階級内部でのひとつの変化へとみちびくにすぎない。すなわち、総使用労働力にくらべて常雇労働力の占める部分が減少する。常雇労働者ならびに臨時雇労働者の物質的・社会的状態がいかなる影響をうけるかを述べておかなければならない。より集約的な土地耕作は、それ自身もちろん住民一般の文化水準ならびに生活基準を高める傾向を内蔵している。多数の定住せる自営者たちが増加した収益を完全に取得するところでは、その結果は住民の全階層の、したがってまた労働者

の、生活諸要求のたえまない上昇であるにちがいない。これに反して大土地所有の優勢の下では労働者にとってこの問題は疑問である。確固たる労働制度が、以前から高い食糧要求になれている労働者に、増加した収益への完全な参加を保証しているところでは、同一の結果が生ずる。メクレンブルク・東ホルシュタイン・ノイフォルンメルンではじつさにそうである。その逆がすくなくとも可能であることを、シュレージエンのもっとも集約的に経営される諸部分の労働者の悲惨な状態が示しているが、そこでは上述のようにその労働制度が、そして同様に一部分はその労働者の国籍が別種のものである。それゆえ耕作の集約度の大小もまた地味と同様にそれ自身つねに有利に作用する一要素であり、ただ事情によつては労働者階級の社会層の影響やその民族的習慣の影響をつうじてのみ重要な意味をもつところの一要素であるようにみえる。しかしながら、それはそうみえるだけである。その理由は、われわれがくりかえし見るように、もしほんとうに労働制度の種類が、それゆえ農業労働者階級の社会層や社会的編成の種類がこれらの物質的狀態にとつて決定的であるならば、またさらに、もし農村における現在の権力諸関係の下

で労働制度の貨幣経済的形成が労働者の物質的狀態をひどく危うくすることがあきらかであったとすれば、この貨幣経済制度を多少とも完全なものに仕上げる傾向をもっているところの経営様式の転換は、同じ危険を内蔵するにちがいないからである。しかしそれは集約的経営様式のばあいにあてはまることである。

以上に指摘されたことは、労働制度が概して不変のままであるかぎり、集約的耕作はまず第一に、土地面積当りの常雇労働力の相対数をふつう増加さすものだということである。同様にしてそれは同じ前提の下ではこれらの収入を高める。古くからのインストマンは分け前によつて支払われるので、同一の狀態がづくばあいにはかれの収入は増加する。⁽¹⁾

(1) 分け前諸関係がほぼ不変のままであつたとしても、肥沃な諸地方では非常に高い打殺者収入がみいだされる。福音社会会議のアンケートの報告が述べるところによれば、ケーニヒスベルク郡の農村部ではいろいろな種類の穀物で年平均百二十ノイシエツフェルまでがみいだされる。

——そのことは、ふつうよりよい土地においては土地耕作が

高められるとともに分け前率が引き下げられるということ、またこのことは機械打穀が導入されるばあいつねにそうであるということによつては、必ずしも変わらない。¹⁾

(1) 東プロイセンでは今日なおしばしば一〇ないし一一シエッフエルがふつうであり、もっと西では長いあいだ一五ないし一八シエッフエルが代表的であった。よりよい土地においては蒸気機械で打穀されるばあいその分け前は、それが存続しているところでは、いまや三三シエッフエルにまで下つているが、そのばあいなお利益配当の性格を持つにすぎない。收穫分け前は今日おそらくどこでも廃止されている。それはところによつては五束^{ブサ}堆^ヱ(一)であった。

しかし發展のその後の経過においては——われわれがみたように——分け前関係が完全に排除されて、固定した現物給によつて置きかえられるのがつねである。それによつてとにかく収益の増加への労働者の参加に終止符がうたれる。ところでこのことはそれ自身、それが状態全体であれ、またとくに食糧状態であれ、ひとつの悪化を意味しない。反対にさしあたりそれは労働者にその消費数量の保証と調節をつう

じて非常にしばしばある改善をもたらす。しかし、報告からものはっきりとわかるように、穀物による高い打穀賃金収入がなくなるので、それは家計において穀物要因に都合な、馬鈴薯要因のがわへの移行を意味する。そしてそれと手をたずさえてふつう貨幣給与のための現物給与一般の後退が、それゆえにプロレタリア化の道での一歩が進められる。しかしプロレタリア化はなによりもまずその栄養にかんする強固な伝統の崩壊をも意味する。農業労働者の代表的な食糧は、百年前までは比較的稀な肉食と穀物および牛乳から成っていた。

時のたつにつれて馬鈴薯はますます「日々の糧」としての意義をもつようになった。これは、見かけほど考慮しないでないことではない。国民の栄養において馬鈴薯の意義が相対的に増大することは、それだけでは有害でないかのである。それどころか、同一面積の上でより多数の者をやしなう必要がこの食糧品を要求する。しかし食糧状態全体にとつてそれらにみあって増大する重要性をもっているのは、そのばあい馬鈴薯と一緒に何が消費されるかという問題である。というのは、馬鈴薯は胃をつよく満たして、生理的に必須の蛋白質をそれにふさわしいだけ身体に供給しないのに、肉体的満腹感

を生むという特性をもっているからである。われわれは中世以来文化的向上の随伴現象として、さしあたり肉食に不都合で穀物食に好都合な国民栄養における転換を経験した。農村住民の下ではほとんどもっぱら穀物食であったことが、おそらくすくなくからずかれらの精神的特徴、すなわち無感覚な

きらめと従順さの生理的基礎をなしていた。その後この世紀に肉食がふたたび文化の測定器になりはじめる、そして向上しつつある近代のプロレタリアートの消費の典型は、ますます馬鈴薯と肉ないしは——火酒で構成されるようになる。火酒は馬鈴薯が身体に供給しなかったものを、とかく見せかけ、のう、えだけで補充するにすぎない。それゆえ全体としての国民の栄養にとって決定的であるのは、馬鈴薯消費の増加にたいしてそれに応じた蛋白質の（肉または牛乳の）供給が均衡を保っているかどうかということである。そして農業労働者の状態やかれの社会的地位にとって、ならびに相対的に十分な食糧状態を保証する上で、まったく決定的な意義をもって

いるのは、こうした事情の下でのかれらの家畜飼養の運命である。主観的にも客観的にもそれはかれらの家計の核心をなし、また家族の共同の利益において家計内部でその妻と未成

年の子供たちの労働をそれ相應に利用するための基礎をなしている。しかしまさに、それこそが集約的土地耕作のかわらぬのもっともはげしい攻撃にさらされている、それは土地価値の上昇が放牧地の廃止を要求するためである。

じっさいにまたわれわれは、普遍的ではないが、おそらくとくに耨耕作物栽培の、だがまた——そしてこれが特徴的なのであるが——集約的畜産経営の随伴現象として、さしあたり鷲鳥・羊・牝牛飼養の制限をみいだし、ついでその廃止をみいだす。豚だけが残るにすぎない。この進行はまた現物給の古くからのすべての意義をうちこわす、それはいまや労働者の家族経済においてはほんらいただ消費的で、生産的ではない目的に役立つにすぎない。労働者はそれによってプロレタリアになったのである。そしてかれの自由への関心はついに貨幣賃金を要求するようになる。またそれゆえにその発展は、プロレタリア化した無所有の労働者もはやインスタ農地をまったく受け取ることができないために、必然的に現在支配的な状態を乗り越えてシュレージエンにおける「賃金ゲルトナー」のばあいが存在するような諸関係へと向かうのである。自己所有（家具類と家畜）の大きさと自己経営の意義

とは相互作用しており、そのことはシュレージエンの雇人と対比せられたメクレンブルクの雇人の保険件数をひと目みればわかることである。この理由からも、常雇労働力としてインストロイテに取って代わるところの、貨幣でのみ支払われる「自由な」労働者の数はたえず増大する。かれらのあいだでは食糧としては馬鈴薯が主たるものであって、かれらの穀物や肉の消費はうたがわしい。まったく庄倒的に報告されているのは、自由な労働者の物質的生活基準がインストロイテのそれよりも悪いものであるということであるが、しかし同様にたしかなことは、かれらがまた常雇労働力のたえず増大する部分をなしていることである。自由な労働者にたいする需要こそは、すでにくりかえし指摘された理由から数十年來もつとも著しく増大し、かれらの賃金——貨幣賃金——は上昇してきたが、他方全部現物で支払われる契約労働者の収入は比較的に固定したままであった。この「自由な」労働者たちは以前には、ときおり数グロッシェンを片手間にもうけた村落の一員であったか、もしそうでなければ一八四九年にはまだ入れ代り立ち代り貧民救済法の厄介になり、農業の内外で仕事をみつけたところの数の上では取るに足りない農

村人口の最下層民にすぎなかった。いまやかれらはその相対的意義がたえず増大しつつある一集団である。かれらの賃金水準は、ほぼ同一の労働制度をもった個々のわりあい大きな区域内部では均等化する傾向を示している。しかもそれは、一八七三年に比較的富裕な諸地方でえられたものに近似するところの、それゆえより、貧困な諸地方ではしばしば賃金の著しい騰貴を意味するところの一水準に、である。これに反して古いインストロイテのデプタントへの変化は契約労働者の賃金水準を、ふつうあまり有利でない諸地方（最悪の諸地方でこそないが）の水準を著しくは越えなければいけども、いくらか上の水準に、しかも家畜飼養の廃止によってしばしばそれ以下に押し下げられるところの水準に均等化する。しかし自由な労働者の高められた貨幣賃金は、物質的狀態としてはただもつとも有利なはいにだけ、自由な労働者がそれを犠牲にして増加するところの、デプタントの総収入とひとしいものを意味するにすぎない。われわれは家長的労働制度がまだ優勢な諸地方における全結果として、かれらの最上層の社会的な階級的転落および小企業家階級への連鎖の切斷の増大と結びつけられたところの、かれらの下層の以前の狀態とく

られば高められた一般的なプロレタリア的水準での農業労働者の生活基準の平準化をもっている。われわれはさらに資本家の労働制度のたえまない進出をみいだす。しかしこの資本家の労働制度がすでに久しい以前から存在しているところ（シュレージエン）では、われわれは最低の賃金水準と最低の社会的・物質的生活基準をみいだす、両者は発展によって多分この状態にたいする忍従が終る限りでのみ、高められるのである。それゆゑ資本力のあるイギリスの工業に生ずるような労働者貴族階級の発展への傾向とはまったく反対に、ここでは常雇労働者の下での資本家的変革はたがいと同質的なプロレタリア大衆の発展へと向かっている。もし発展がちがった経過をたどるとすれば、それは奇妙なことでもあろう。その理由はまさしく高度に集約的な耕作（甜菜）は、なんの特技ももたない労働力の最大量を必要とし、工業の「一年季を入れた」労働者に似た範疇の労働力にたいする需要はなるほど決して完全に欠けているわけではないが、高度に集約的な農業経営にとっては、技術的に高度に発展した工業におけると同様の重要さが、いくらか比較しうるほどにもその需要には備わっていないからである。

しかしいまやこの現象は出稼ぎ労働者階級の不断の普及に直面して、なおいっそう決定的なかたちをとっている。というのはここでは東部における民族の対立が台頭するからである。ポーランド封鎖の廃止（一八九〇年）以来、東部においてはそこからザクセンに向かうだけでなく、ロシア領ポーランドやガリシヤから東部諸州へ、そしていっそう遠くまで——時にはウエテラウまで（！）ゆくザクセン出稼ぎ労働隊がみられる。この外国人流浪者の数は一時は——最近の数字はいけれども——四つの境界州だけで年間約三万人に達した。労働者の素質については最低限の注文しか付けないところの高度に集約的な（甜菜）耕作こそが、かれらを引き寄せる。最高の生活基準をもった労働者ではなくて、最低の生活基準をもった労働者が選ばれて耕圃を世話する。ここでもグーツヘルのたんに純経済的関心だけが決定するのではなくて、それと間接にしか結びついていないかれらの権力的関心が決定するのである。ポーランド人にたいする処分は勝手放題である。すなわち、目くばせ一つすれば、近隣の警察管区長官が——地主農場所有者でもあるが——ポーランド人を国境外に追いかえす。ポーランド人の導入は、ここではすでに予想さ

れた階級闘争において、めざめつつある労働者の自覚に向けられたもつとも本来的な意味での闘争手段である。そして報告は、それはこの点でも有効であったと勝ち誇って告げている。流出が流入をひきおこしたのか、または後者が前者をひきおこしたのかという論争は、けつして止むことはないだろう。それらの意義を評価するには、論争はまったく無意味である。すでに述べたように、流出と流入とは所有と労働とのあいだの潜在的たたかひにおける闘争手段なのであるから、両者は相互に増大しあうのである。流出は姿をかくしたストライキであり、これにたいしてポーランド人の導入はそれに対応する闘争手段なのである。

さて最後にこの闘争においては東部の土地所有分配にも宿命的な役割があたえられている。⁽¹⁾

(1) 大所有の優勢はそれ自身社会的階級差別を増大するだけである。労働者の物質的状态は、確固とした典型的労働制度が存在するばあいに、また存在するかぎりでは、比較的大きな地主農場のつよい労働需要によつて高められるのである。過去から引きつがれた労働者階級の高い生活基準の結果、従来はノイフォルボンメンンにおいて

てはそうであった。ポーランド人の労働者階級に強大な大貴族が対峙している上シュレージエンでは、その反対である。

労働者不足に見舞われているのは、とうぜんのことながら、よそ者労働力を使用するところのその所有諸範疇、すなわち一部はすでに大農がそうであるが、とりわけその規模につれて増大する程度において、騎士農場がそうである。農民はポーランド人の輸入を計画的に実行する状態にはまったくない。騎士農場所有者だけがそれをすることができる。目下のところ、かれが集約的に経営しようとすれば、かれはまさしくそれに依存している。すでに今日ではかれは収穫労働力にたいする通常の需要を、もはや近隣からはみたすことができない。なせできないのであろうか。それはこの近隣の大部分もまた、同様に労働力の「生産者」ではなくて、「消費者」である。騎士農場から成り立っているからである。——いいかえれば、村落が足りないためである。地主農場区域の平均的人口密度はグロップベツェル、^{グロップベツェル}村のそれのごく一部分にしか当たらない。もちろんその理由は、前者がまず第一に当の場所に定住する人口を養わないで、そこでの生産物を外国市場へ送るからである。メ

クレンブルクでの王領地におけるように、賢明な植民によってすっかりした農民身分がつくり出されているところでは、労働者不足はあまり訴えられず、流出はわずかである。農民を土地から追放してしまつた騎士階級の区域では、この略奪は——それは経済的なものでもあれば形式的・法律的なものでもあるので——労働力の欠乏によって復讐される。大所有が優勢である東部こそが最高の負債件数ともつともはげしい労働者不足を示しているのは、けつして偶然ではない。「父祖の罪業」がこんにちの地主農場所有者をおそい、幾世代もこの文化的後退を意味するであろうようなスラブ人の氾濫でわれわれをおびやかしている。——しかしそのはあい同時に双方にとつて闘争の見込みのないことは明らかである。東部農業における階級闘争は沈みつつある小舟の上での格闘であらう。

つまり双方が沈んでしまふであらう。そのことは、労働者側では閉結禁止令の廃止後もその闘争が非組織的なものにと止まらざるをえないであらうだけ、それだけいっそう確実である。形式的公平の公示を農業労働者にあたえうるにすぎないところの団結の自由は、かれらの分屯の仕方がその目的意識的な行使をたえず妨げるのであるから、局地的な訴訟問題を除け

ば、かれらには闘争手段として何の役にも立たないであらう。このことは、プロレタリア化の進行が労働者同士をたがいにより同質的にしてしまつた後でもそうであらう。——いまのところではその利害がひどく相隔たつているかれらの諸集団を統一できそうにないということがそれに付け加わる。

農村では労働者の所得がしばしば増加してきたこと、部分的には著しく増加してきたことを慰めとして、この重大な諸現象に直面しながら満足するものは、ありきたりの福祉政治家か企業家の利益代理人だけであらう。じつさい農業の分野における状態は、階級対立の先鋭化に関しても、結局はすくなくとも、工業の分野におけると同様に重大化するであらうし、またげんに起つている問題はまことに「労働者不足」につきるものではない。土地所有者ならびにその労働者の性格の極めて深刻な変化が生ずる。そしてそれは両者にたいする国家の態度を根本的に変え、土地所有者から国家の政治的腹心であるためのかれらの資格を奪うにちがいない。そしてこの変化は、人口の激しい移転、生産と労働者階級にたいする文化の危機をもたらししたが、それは純政治的にもどうでもいいことではないのである——。

さて、ここで強調された発展傾向が唯一絶対の自然法則の性格をもつにすぎないとするならば、この不愉快な状態を確認することは今日かくも流行している社会政策的悲歌のひとつを意味するにすぎないであろう。しかしながらそれは、実情にあてはまらない、その発展傾向はむしろ、没落しつつある一階級の支配の諸要求と結びついた東部の農村における所有分配が、必然的にもたらすところの特殊な諸条件の下でだけ、その作用を展開しうるのである。そうでなければそれは西部においても同じ土壌の状態の下では同じ強さで生じたにちがいないであろう。そしてそれは実情にあてはまらない。

——それによって、たとえば西部と南部は指摘できるようなどんな問題も農村においてはもっていないのだといっているわけではない。しかしここで述べられた経済的転換にとつては、大所有や大経営が面積の二〇%を占めるかまたは五〇%を占めるかということ、ほぼ同じことであるか、またはたんに量的な相違であるとかではなくて、それはたがいに反対なのである。十万の農民は、今日の競争状態が農業にもたらす困窮の時期にさへ、故郷の土地にたいしては十万の農業労働者とはちがった態度をとる。

ここで起っている大きな文化問題に——わたしはこの特徴づけによって農業労働者の状態とその発展の意義を過大評価するものではないと信するが——国家が効果的に関与するための前提条件はまさにつきのこと、すなわち人々が東部における現在の土地所有分配を、どんなばあいでも根本的な干渉が計画されてはならないところの、現存の政治的ならびに社会的組織の触れるべからざる基礎のひとつとはみなさない、ということである。集約的耕作の危険も、またそれが集約的耕作を助成しなかりでの世界市場の循環一般の危険も、東部におけるわれわれの文化にとつては主として現存する土地所有分配と関連している。すなわちたぶん最良の土地（たとえばシュトラールズント県）でも、他方では最悪の土地でもなくて、おそらく東部の特色ある主要な地積である典型的な「中位の砂質土」が、土地耕作や農業労働者の文化水準をそこなうほどにこの所有分配に固定され、抵当負債の金のかすがいでしめつけられているのである。

そしてその労働制度もまた所有分配の同時的変更なしには改造されえない。ケルガーが説得的に立証したように、われわれは労働者のもっとも有利な諸関係を、いまのところ一方

ではウェストファールンのホイエルリンクのばあい、他方では東ホルンシュタインの借地労働者のばあいにみいだす。双方のばあいにその関係に特徴的なことは小借地契約が労働契約と結びついていることである。労働者は、賃借されしかも代価を見積られて地主農場によって耕作された土地と家畜放牧地とを受け取り、地主農場には日給で労働を提供する。そして双方の債権と債務は相互計算される。それはインスタ関係ではあるが、一定限度の土地をあたえられ、インスタ関係にいまなおまといつく隷属的要素を除いたもの、——つまり自由な労働契約でありながら、労働者自身の小経営でもある。しかしながら、それは地方的には存在するかもしれないが、全体として労働者が東部におけるこんにちの所有分配の下でホイエルリンクの地位を引き継ごうと決心するであろうと信ずるのは、まったくの幻想である。クナップは正当にも発展が一般にその逆の経過をたどることを指摘した。それは労働者の立場からもうぜんのことである。その理由はより集約的な耕作がかれらにひとつの成果を、しかも文化的成果をもたらしたからである。けれどもそれは物質的分野にあるのではない。つまり労働者は自由を学びとったのであって、かれ

らはそれに向つて暗黙のうちに努力しており、そうでなければ、ますますその物質的満足をさへ犠牲にする傾向があることは明らかである。こんにちの土地所有分配の下では、故郷の内部で上昇する道があるという観念——その客観的可能性ではなくてこの観念が決定的なのだが——は育ちえない。そしてこうした事情の下では、かれらは無意識にしかし確実に、つぎのような適切な結論をひきだす、すなわち、農村における大所有と大経営の圧倒的支配の下では故郷喪失と自由とはまったく同一のものである、と。

それゆえもつとも重要な問題は、農業労働者問題の見地からも、いぜんとして内地植民である。

それはこんにち一方では植民委員会アウストラリエンコロニヤンの手中にあるが、ここでは国家によって遂行されている。また他方では、私的大土地所有者の申し込みにもついで騎士農場の分割を仲介している総務委員会ゼミナルコングレガチオンの手中にある。植民委員会はすでに約千五百人、総務委員会は約六千人の農民を入植させてきた。しかし私的植民が量的に優勢であることは二つの弱点をもっている。すなわち、(1)それは非常に大きな部分に零細な小人農民クニヒトを割り出している。というのはかれらは生産物を主として

自分で消費してしまうので、この者がこんにちもつともたやすく生産物の値下りに耐えることができ、またかれらは賃労働を使用しないので、労働者不足になやむことがないからである。しかしそれゆえにこそ、最少限の文化的要求で満足することができるところの、その人口層がこの方法で定住する危険が、それゆえに土地所有者プロレタリアト——いとうべきものの中でもつともいとうべきもの——が生れてくる危険がある。(2)このことは、総務委員会があたりしく生まれてくる自治体を装備するために共同地を十分に世話することが自由にできないのでなおさらそうである。しかし、その零細民クラインホイザにとつてこそ、共有地は死活の問題なのである。

それゆえに、大規模に計画された国家的植民、つまり王領地植民が——七十年代にすぐにまた放棄された試みと結びついて——それと並行して進められることが絶対に必要である。他方ではいかなる識者も、国家の王領地在り高が著しい、少をこうむり、農業の分野で国家がそのもつとも重要な調整器のひとつを奪われることをのぞみはしない。

「土地取用」の観念にたいするおろかな心配だけが、だれもがひそかに考えていること、つまり東部における大所有の

大きな部分は私人の手では支えきれないということ、広範

な人々が口にするのを妨げているのである。急ぎすぎることはないが、組織的に着々と、そのためにあたえらるべき予算からこの部分が買集められ、王領地に転化されればよいであらう、そしてそれは国家の土地改良貸付をあたえられて資本力ある王領地小作人に貸し出される。こうして王領地在り高には、他方でそこから取り上げられるものが、一方で付け加えられる。そして結局は国家の財政的利益はそのばあい好転するであらう。もちろんそのさい、この形式においてはなおそれらくまだどこでも解決されていない大きな課題が問題になる。人々はあらゆる王領地管理にたいして、それがこうしたことやりとげる用意があり、またやりとげることができたらうという信頼を持ってないかもしれない。しかし、まさしくドイツの王領地管理が——プロイセンだけではなくたとえメクレンブルクやバーデンの王領地管理が、国民の死活の利害においてそれに課された課題をこれまで抄らせてきたのが明らかだとまとめられるならば、お世辞をいっているという嫌疑をこうむらないものと私は信じる。過去が約束したところのものを、未来はよりどころにしてほしいものである。(二七)